

「折尾駅舎残して」署名本格化

開業120年の日本最古の立体交差駅で、高架化に伴い解体予定のJR折尾駅（北九州市八幡西区）駅舎を保存して改札口に活用しようと住民団体「折尾駅舎を『改札口』として活用する会」（仰木篤彦会長）が8日、駅前で本格的な署名活動を始めた＝写真。

会は2月に発足。この日はメンバー約10人がのぼり旗を立てて協力を呼びかけた。署名はまず1万人を目指し、北橋健治市長に提出する。

また会が利用客にアンケートで「駅舎取り壊しを知っているか」尋ねると、「知っている」が82人（48%）、「知らない」が89人（52%）と答えた。「駅舎を残したいか」の問いには「残したい」が142人（83%）、「残さなくてよい」14人（8%）、「どちらでもよい」

住民団体「改札口に活用を」



分らない」15人（9%）だった。

仰木会長は「高架化やバリアフリーには反対しない」と述べ、「市は駅舎解体について余り情報開示しておらず、知らない人が多いし、都市計画についての市民参加も不十分。駅舎は

県指定文化財級の価値があり、折尾のシンボル、心の古里だ」と話している。署名の問い合わせは仰木会長（090・9407・1193）。市議会には、別の団体から昨年、駅舎保存活用を求める陳情が出され、継続審査となっている。（坂本康浩）

朝日新聞 2011年6月9日 朝刊

JR折尾駅舎保存へ 住民らが署名活動開始

日本初の立体交差駅として知られ、高架化事業などで解体が予定されているJR折尾駅（八幡西区）の駅舎について、住民らの「折尾駅舎を『改札口』として活用する会」（仰木篤彦会長、約50人）は8日、保存を求める署名活動を始めた。

駅は1891年（明治24年）開業。現駅舎は1916年（大正5年）築の洋風の木造2階建てで地域のシンボルとなっている。

北九州市の計画では、高架化事業に伴って新駅舎を建て、現駅舎は解体。その後、現駅舎の装飾物などを再利用した複製の施設を建てる。解体時期については、土地買収が難航し、決まっていない。

同会は、新駅舎が完成するまでの仮改札口として現駅舎を移築、再利用することを提唱。8日は、会員らが駅前に立ち、利用者に取り壊されることを知っているか「駅舎を残したいか」を尋ねた。約半数が解体されることを知らず、8割強が現駅舎を残したいと答えたという。署名は3万人分を集め、市に提出する予定。

仰木会長は「駅舎は折尾のシンボル。次代に残したい」と話した。

読売新聞 2011年6月9日 朝刊

折尾駅舎の。レプリカでの複製は2018年以降としており、地域のシンボルとして保全するため、地域住民が自ら建物の維持管理から運営までを行い、駅舎保全に必要な整備費（敷地取得費・建物保全費）は、住民が広く住民や企業へ寄付金を募る一方で、管理・運営費についても、原則、自主財源で賄うとしている。

2009年（平成21年）6月30日、北九州市と「おりお未来21協議会」の方針